

月刊山形発

元気なモノ作り (2)

(有) 鑄心ノ工房

1997(平成9)年設立。鑄物工芸品の製造販売、デザイン開発、技術開発。増田尚紀代表(鑄金家・デザイナー)。全日本中小企業輸出見本市・中小企業庁長官賞、日本デザイン振興会グッド

「薄肉美麗」の山形鑄物に 現代性と普遍性吹き込む

デザイン賞、山形エクセレントデザイン賞など受賞多数。山形市の伝統工芸産業技術功労者褒章、東北経済産業局伝統工芸産業功労者表彰、日本クラフトデザイン協会会員、東北芸術工科大非常勤講師。工房は山形市銅町2-1-12。電話(625)4485。ショールームは同円応寺町9-10。

デザインの師である芳武氏に対する畏敬の念は深い。氏は戦前、東京美術学校(現東京芸大)工芸金工科に進み、卒業後は商工省工芸指導所技官に。戦後は武蔵野美術大学教授となる。戦前戦後を通じ平成5年に83歳で亡くなるまで一貫して産業とデザインの融合に精魂を傾けた。本県産業にデザインで寄与した功績で三浦記念賞を受賞している。

人間国宝高橋敬典氏は生前、その仕事ぶりに、「先生のデザインは新鮮で機能的でモダン。私にとっても会社にとっても大きな恩恵を受けた恩人」と語っている。敬典氏の経営する山正鑄造は芳武氏とデザイナー契約を結び、すき焼き鍋、ステーキ皿は一世を風靡(び)した。

増田氏は、師が初めて手掛けた山形鑄物のデザインを復刻した。1954年に産業工芸試験所主催の「デザインと技術」展に出品し好評を博した作品で、鉄皿・鉄鉢は山形鑄物の特長を表す「薄肉美麗」の言葉そのものだ。

「デザインに対する思いを次のように語る。

「それ(デザイン)は決して派手なものではなく、むしろ地味なもの。生活の中でちよつと気がかりな存在、また、「暮らしのパートナー」であり、長く大事に使われるもの。例えてみれば恋愛ではなく結婚」と。



山形デザインコンペティション実行委員会(県、山形商工会議所連合会などで構成)は、魅力的で競争力の強い商品づくりとデザインマインドの向上を目指す「山形エクセレントデザイン」事業を展開。山形県内で企画・開発、生産されている家庭・業務・公共用品の3分野を対象に優れたデザイン製品を選定・顕彰しています。山形商工会議所は「キラリ山形発 元気なモノ作り」シリーズ第2弾として、管内でエクセレントデザインに選ばれた事業所を紹介しています。今月号は「拓かれた鑄物工芸」を追求する(有)鑄心ノ工房。

手掛けた鉄瓶、ティーポット、香箱、風鈴、茶碗、ソーサ、茶筒、箸置きが整然と並び、重厚、軽快、清楚、鮮烈。日本のでかつモダン。素材は鉄、アルミニウム、ブロンズ等々。増田尚紀氏のデザイン、制作の製品の数々だ。

浜松市出身。山形との縁は武蔵野美術大学で南陽市出身のクラフト界の第一人者を故芳武茂介(よしだけ)・芳武氏に「デザインを本気になって勉強したかったなら、産地に行つてものづくりの現場を学べ」と山形行きを勧められた。36年も前のことになる。創業400年を超す山形鑄物の老舗菊地保寿堂で、後に養父となる故菊地熊治氏に鑄物製造のイロハをみっちり仕込まれ、鑄物の心、伝統の技を身をもって知った。

600点に及ぶ製品を考案。平成9年に独立し「鑄心ノ工房」を立ち上げた。以来、グラタン皿としても使える鉄鍋、おしゃれなティーポット、山形鑄物と有田焼といった全国各地の伝統技術・素材とコラボレートしたポットなどを次々と発表。山形エクセレントデザインには平成10年の第1回から出品しデザイン賞を連続して受賞している。

海外の展示会、見本市への出品も意欲的だ。そのひとつがドイツ・フランクフルトで毎年2月に開催されている展示会「アンビエンテ」。ギフト用品、家具、絵画、インテリア、キッチン用品、文具などありとあらゆる雑貨品が並び、世界最大規模を誇り、「海外買い付けの聖地」と称されている。そこに毎年出品している。

ヨーロッパでは日本の茶の文化に理解がある。ティーポットは人気を集める。また、世界で通用するブランドを構築し販路開拓するため、経済産業省が支援する育成事業(sozo-comin)の認定を受け、パリで開催されたインテリア総合見本市「メゾン・エ・オブジェ」の日本展にも出品している。

「きっかけは国、県の事業だが、

自分たちができる範囲で継続してきた。デザインから製造・販売まで手掛けていることだからできる。実際に現地に出掛け、肌で自分の製品がどう評価されているか、何を求められているか知る上でも貴重な手掛かりだ」。さらに、「インターネットにより確かに世界は狭くなり、国内のみならず海外と直接取引できる時代となった。それだけに製品に対する目が厳しくなっている」と続ける。

芳武氏譲りか。後進の指導にも熱が入る。自分たちより上の年代の職人技を、ともすれば頭でっかちになりがちな若い人たちに伝えなければならぬ、という。東北芸術工科大創立当時から非常勤講師として学生に接してきた。

無理を承知で思うことがある。銅町が昔のような鑄物街であったら、と。山形市の伝統工業鑄物は、昭和46年以降西部工業団地へ移転した。美術工芸鑄物、鉄瓶等日用品鑄物業が残っているとはいふものの、城下町形成以来続いた住工一体の面影を求めるとは難しい。銅町に観光客が訪れ、山形鑄物を手にしてくれたなら、「ショールームからはそんな願いが伝わってくる。



銅町の工房からは世界で評価される鉄瓶、ケトルといった独創的な製品(写真右下)が作りだされる。右増田氏、左が長男雄亮(たけあき)氏。写真右上は工房から歩いて数分、円応寺町に開いたショールーム。

日用品工芸品は暮らしのパートナーであり、長く使われるもの。例えてみれば「恋愛」でなく「結婚」。デザインは、その日用品に潤いを与える。